

鶴屋南北研究会編

此位官他者爲々南北の像

岩井半四郎

一丈二尺

鶴屋南北論集



国書刊行会

鶴屋南北論集

一九九〇年十一月二十二日 初版発行

編 者 鶴屋南北研究会

発行者 割田剛雄

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―一八
電話〇三(九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

製 本 田中製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

ISBN4-336-03187-8

鶴屋南北論集

鶴屋南北研究会編

目次

文化二年前半の勝俵蔵

井草 利夫

7

『東海道四谷怪談』の演出考——首が飛んでも動いて見せるわ

石澤 秀二

29

日本演劇史からみた南北

今尾 哲也

55

南北と現代演劇

落合 清彦

63

南北作品と演出

郡司 正勝

71

歌舞伎と賤民——南北の出自を中心に

諏訪 春雄

87

南北と玉藻譚——『三国妖婦伝』と『玉藻前御園公服』

高橋 則子

117

歌舞伎「濡れ場」考

中山 幹雄

159

燈籠仏一件始末——南北語彙考証のうち

服部 幸雄 187

南北の劇空間

廣末 保 211

彩入御伽草——小幡小平次の系譜

森山 重雄 233

鶴屋南北研究会の活動——あとがきにかえて

中山 幹雄 275

執筆者紹介

鶴屋南北論集

文化二年前半の勝俵蔵

井草 利夫

文化二年（一八〇五）は勝俵蔵（後の四代目鶴屋南北）五十一歳である。昨文化元年秋に初代尾上松助と組んだ『天竺徳兵衛韓漸』^{てんぢくとくべいいじんこぼなし}の大成功によって一躍名声を挙げ、十一月の顔見世には河原崎座で念願の立作者になったところ、烏亭焉馬と木村園夫という二人のスケの作者の加入によって挟み打ちに遭い、苦しい作劇を余儀なくされたが、作品『四天王楓江戸粧』^{してんわうもみぢのまじぐま}は結果的には彼の書いた部分が最大の好評を得て、「大評判大入三座一の当り」（歌舞妓年代記）を取ったので、彼はすこぶる気分よくこの新春を迎えることが出来たと思われる。

この年、わが国はいわゆる化政度と称される束の間の天下泰平の世に入っているが、海外からの圧力は徐々に厳しく、幕府はこの一月にロシア船来航について沿海諸藩に警戒を要請して

おり、また、昨年九月長崎に来航して貿易を求めたロシア使節レザノフに対し、三月になってこれを拒絶する返答を与えている。

海外ではこの年に世界史上有名なトラファルガーの海戦が行なわれた。フランス・スペインの連合艦隊とネルソン率いるイギリス艦隊とが決戦し、ネルソン提督は壮烈な戦死を遂げたが、イギリス側が大勝し、ナポレオンの英国攻略の雄図は挫折したのである。

また、ゲーテと並ぶドイツの劇作家シラーが、前年に名作と言われる『ウィルヘルム・テル』を初演したあと、四十七歳で没した年でもある。

わが国では、文学方面を見ると、山東京伝の読本『桜姫全伝さくらひめぜん曙草紙あけぼのぞうし』が刊行され、彼の弟子であった曲亭馬琴の読本『新編水滸画伝しんへんすいこくわでん』第一編が発刊されており、この頃から合巻が出現するようになった。歌舞伎界では、女形として将来を囑望された初代松本米三が六月十一日に三十一歳の若さで夭逝し、関西の三代目姉川新四郎が五十八歳で二月に、三代目藤川八蔵が二十八歳で五月に、それぞれ死亡した。

正月には、江戸三座ともどういうわけか芝居の興行はなく、それぞれ二月に入ってからの上

演で、中村座は四日初日の『全盛虎女石』、市村座が十六日からの『花雲曙曾我』で、俵蔵所
属の河原崎座は最も早く、二月朔日から『御江戸花賑曾我』の蓋を明けた。

俵蔵は居なりの立作者であるが、顔見世の時同座して活躍したスケの烏亭焉馬が退いた。彼は若い友人の座頭役者初代市川男女蔵に口説かれて入座したのだが、歌舞伎に精通している文筆家ではあっても、元来幕外の人であるだけに、座付作者としての芝居作りの煩雑さに音を挙げて、懲りてしまったらしく、一度書いただけで、さっさと作者をやめて元の文人へと戻ってしまった。三升屋二三治はこの事を『作者店おろし』の中で、「此時出て早速引込み、歌舞伎の作者あきらめし嘸し、中の作り物よみ本と違ひ、焉馬先生程の人さへ此業ばかり出来ぬといふ」と書いている。座頭の市川男女蔵は、前回、初代尾上松助と緊密に提携している立作者の俵蔵を押さえようとして、焉馬を迎え入れ起用しただけに、彼に逃げられた現在、松助と俵蔵のコンビを目の前にして、落胆も大きく、具合の悪い思いもせざるを得なかったであろう。

同じスケの作者だった木村園夫は今回も残り、別座に位置しているが、彼をひいきにしている立女形の二代目小佐川常世が病気で休演することになったので、手持無沙汰の感は免れなかったに違いない。

二枚目作者の本屋宗七、三枚目の曾根正吉に変わりはなく、下級作者も亀山為助・金麗助・江田幸策と異動がないが、葛飾泉次が葛飾万寿に変わっている。これは泉次を万寿と（おそろく縁起をかついで）改名したものと思われる。

役者の陣容を文化二年三月刊行の『役者一口商』ひとくちあきなりの位付などに拠って見ると、座頭の男女

蔵は上上喜で前年通りの立役巻軸である。立役にはほかに松助の養子で後に三代目菊五郎になった若手人氣花形の尾上栄三郎がおり、上上吉で六枚目に位置し、老功の山科四郎十郎が上上士で九枚目、市川門蔵が上上士となっている。

実悪の部では松助が筆頭に位置し、位付は昨年より上がって上上吉になった。なお文化二年正月刊行の『役者正札附』では、惣巻尾に据えられて同じ位付であり、ほうび大入を得ている。いずれも『天竺徳兵衛韓嘶』大成功の余慶であることは言うまでもない。

敵役の部に入ると、二枚目の松本国五郎が上上吉、次に松本小次郎が上上と続き、道外形では老功の坂東彦左衛門が上上という位付で控えている。

若女形の部を見ると、立女形の小佐川常世が病氣休演ながら功上上吉で巻軸に位置し、事実上の立女形になった中山富三郎は一枚目で上上吉、常世の息子の小佐川七蔵が七枚目の上上で、

二枚あとに『上』の中村松江がいる。

他は子役の部の男女蔵の息子の市川男寅などであるが、大一座とは義理にも言えず、無人に近い座組と見ざるを得ない。

春狂言の大名題は前記の通り『御江戸花賑曾我』である。恒例の曾我狂言で、昨年の盆狂言から顔見世へかけての評判を祝って、御江戸花賑と命名したのであろうが、あまり個性的でない、平凡な名題としか言いようがない。狂言の内容や役者の陣容からみて、凝った命名が出来なかったと思われる。

主な配役については、『役者一口商』の記事を中心とし、『続歌舞妓年代記』『江戸芝居年代記』『戯場年表』『歌舞伎年表』等を参照して記す。

鬼王新左衛門・伊豆の次郎、曾我五郎時宗・本朝丸の綱五郎、紅絹の甚三・悪七兵衛景清（男女蔵）、曾我十郎祐成・小林朝比奈・団三郎・京屋左七（栄三郎）、和田義盛・満江御前・小間物屋重兵衛（四郎十郎）、八幡の三郎・鐘つき堂の政（門蔵）、工藤左衛門祐経・河津三郎の亡魂・革足袋屋半時九郎兵衛・小糸乳母お時（松助）、近江の小藤太・風の神喜左衛門（国五郎）、

馬士げん八・山住五郎太（小次郎）、あは島権兵衛・梶原平三（彦左衛門）、大磯の虎・化粧坂の少将・柳の葉実は月小夜・幸兵衛娘小糸・綱五郎女房おふさ（富三郎）、三浦の片貝・松本の女房（松江）、工藤犬坊丸・常磐津イの字寅（男寅）など。

これらの配役を検討すると、本作は吉例の曾我狂言と『糸桜本町育』の系統とを抱合わせたものと理解される。曾我が一番目時代物、本町育が二番目世話物というところであろう。俵藏は寛政十年（一七九八）六月、中村座の二枚目格時代に『増補糸桜本町育』の作成に関つた経験があるので、本作上演についての参考にしたであろうと推測出来る。

曾我狂言の筋に関しては『江戸芝居年代記』に記録が載っているので紹介する。『歌舞伎年表』にも記載されているが、後者は前者の引用であろう。

大藤内庄右エ門と新造栗梅栗藏、心中のおかしみ大出来、祐成箱根にかくまれ別当の情に而寺侍に身をやつし、工藤を見覚る所見咎められ、何□マ対面の趣向、後に川津絵姿、工藤にもらい、此絵姿ぬけ出て、祐成と言葉をかわし、百五拾日たてば命数つくるゆへ、時節を待て本望をとげよとおしへ、早替りに而又々工藤の所大当り

次の幕男女蔵祐兼に而、栄三郎団三郎の役兩人狩場の切手を争ひ石壇のたて大当り

右のうち、冒頭の大藤内の庄、右エ門は『歌舞伎年表』では彦左衛門となっている。一座に庄右エ門はいないし、○右衛門と名乗る役者もないから、彦左衛門が正しいと思われるが、それにしても彼には大藤内という役名がない。疑問の残るところである。しかし、彦左衛門の大藤内ならばおかしかっただろうことは容易に察せられる。

松助が工藤から川津の亡霊へさらに工藤へと替わる所は、松助得意中の得意の早替りであるし、相手役の祐成は息子の栄三郎だから、気がよく合っていただろうし、観客に大いに受けたという情景が目に見えるようである。

記録されたこの幕は、俵蔵の執筆と断じて間違いないように思う。

石壇のたても、片や若い座頭、片や人気の花形だから、勇ましくも凛々しくて、喝采を得たことは間違いなからう。

『糸桜本町育』の系統の部分については、『江戸芝居年代記』その他に記述の見当らないのが残念である。

次に『役者一口商』に各役者の芸評が載っているので引用する。

男女蔵については「新車文鬼王時宗景清も綱五郎も紅粉ベニコの甚兵衛伊東イヅミの次郎役者すくなゆへ

別してお骨折ながら、棧敷見物は請ましたれど場の請今少し行届かね残念く」とあつて、無人の一座故に多くの役を受持つて大活躍であり、棧敷客には評判良かったが、平土間の一般客には請けなかつたということのようである。人気役者としての評判と実際の技芸との間にギャップがあり、それにしては守備範囲を広くしすぎて、評価は今一つだったのであろう。

これに反して松助は「三朝丈祐経河津ほうこん半時九郎兵衛鐘つきばゞ一人してのおはたらし御功者ゆへ見物は請取ました」と好評であるが、四役ともいずれも松助が得意とする役柄と見受けられるし、書き手の中心が俵藏であるから、長所を引出し欠点を隠すという『天竺徳兵衛韓嘶』以来の作劇法で評判を得たものと思われる。

富三郎については「富三郎丈は少将と綱五郎女房娘小糸月さよ何役をさせても諸人がうれしがりましてお仕合くいや又どこやらに女の情有て見物の氣もぐんにやりといたしますと江戸中の評判く」とこれまた大好評である。ぐにや富という渾名に表現される特徴の、良い方面を十分に發揮して観客に喜ばれたに違いない。役者を仕生かす俵藏の筆の冴えでもあろうか。

栄三郎に関しては「祐成朝比奈團三郎京や左七何をなされても大坂より帰られてよりめつきりと沙汰よく見物が悦びまして珍重く」とこれも顔見世に続いての高い評価を得ている。特

に若手ながら、無人のために大役をいくつも引受けて、それがそれぞれ効果を挙げたということであろう。後の大成をはつきりと予測させるものがあるが、これも前作同様、俵蔵が彼の長所をしつかりと心得て、余す所なく書き込んだお蔭ではないかと想像される。

芸評は以上四人についてだけであるが、それでもおおよそのことは察せられよう。

それでは他二座との評価の比較はどうであろうか。同じ『役者一口商』では、中村座について「中村座は二月廿三日より初りましたる所殊の外賑ひながら狂言今少し出来かねたるとの沙汰多くそれゆへ一座もこれはと申ほどのこともなく」とあり、名作者治助が立作者なのに、狂言今少し出来かねたという誠に低い評価である。もつとも、彼は翌年には病死してしまうのであるから、直接にはあまり筆を執っていなかったのかも知れない。いずれにしろ作品が低調なために、それほどのはなかったというわけである。市村座については「市村座二月十九日より初りました所当時ひいき多き源之助丈病氣にて出勤なくいづかたも残念がり大かたならず」という状況で、栄三郎と拮抗する人気花形の沢村源之助（三代目宗十郎の子、後の四代目）が病氣休演のため、景氣はあまりぱつとしなかったことが窺われる。河原崎座については記述がないが、三座比べてみると、評判記としての評価は河原崎座が最も安定していたと考えられ